

---

Life Burn/Soul Scream ~ **仮初めのヒト** ~

源十郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Life Burn/Soul Scream 仮初めのヒト

### 【Nコード】

N2363Z

### 【作者名】

源十郎

### 【あらすじ】

人は欲深い。目に見えるモノを欲し、尚も欲望の限り無く。そうして欲望にまみれた手が掴み損ねた、身に余るモノは時として災いを齎す。

命は燃やすモノ？

魂は叫ぶモノ？

巨大な欲望の果てに、溢れた災厄に巻き込まれた少年少女の待つ未

来とは？

P E R S O N A 3 P O T A B L E と F a t e / s t a y n i g n  
tとのクロスオーバーです。

某所で掲載していたモノを移転させました。

一応加筆・修正されてます

## C1・其は、夢の歩み人々前編

岳羽ゆかりは『特別課外活動部』のメンバーが住まう寮　　巖戸  
台分寮　　のある一室で、話しをしていた。

部屋は作戦室と呼ばれる場所であり、話し相手は一つ年上の二人組。男性一人と女性一人。

男性は真田明彦といい、女性は桐条美鶴といった。

「岳羽、君は弓道部だそうだな」

美しい長い髪の女性、美鶴が問う。

「あ、ハイ。そうですけど……」

ゆかりは弓道部に所属し、特別課外活動部の『特別な活動』に於いては弓を使う。的は無機質な固体でもなく、人ですらない。

形容するなら……そう、正に『化け物』『怪物』だ。

「いや、何。弓道部の主将はなかなか腕が立つと聞いてな」

「はあ……」

ゆかりは曖昧に返事をするしかなかった。主将の弓の腕前は……これも正に『化け物』『怪物』と呼ぶに等しい。要は、「人に或らざる」という概念が一緒なのだ。『達人』と言えば聞こえはいいが、一般的な視点から見れば常識を逸脱していた。

「腕が立つ……とかそういうレベルじゃないです、アレ。私が入部してから皆中以外見たことないんですから」

つまり、百発百中。矢が吸い込まれる……なんて枕詞は生易しい。あれは最早呪いに等しい。

主将が弓を構えれば、誰もが外れを想像出来ない。皆中するのが当たり前で、皆麻痺してしまった　　文字通り、麻痺。構えに見取れるとかじゃない、皆自身の矢を忘れてしまう程の思考麻痺。

呪われた。皆が。だからこそ、主将も人の子であれ　　と、外れを期待する。この呪いは、彼の矢が外れた時に解する。

「ほう？　そいつは興味あるな」

「え！？ 真田先輩が、ですか？」

思わず返してしまつた失礼な言葉に、むつとする先輩。

私がフオローするより早く桐条先輩が口を開く。

「私も驚いた。明彦、君はボクシングを嗜む者だろうか？」

だが、『彼』は弓だ。武芸として見ても、ボクシングとはベクトルが違う」

それは同意見。私も真田先輩が興味を示す理由が分からない。

「いや、何。確かに懐で殴り合うボクシングと、遠くから必殺を狙い撃つ弓じゃ接点は無いかも知れない。が、その百発百中を体言する程の集中力は、スポーツだろうか武術だろうか気にならないはずがないだろう？」

確かに、と頷くのは桐条先輩。私は、賛同出来るけど 諸手は拳げれない。

弓道は、「道」と付く以上、競技でも武芸でもない。勿論、そういった側面はあるし、私もどちらかと言えば『こつち』だ。だが、『側面』だからこそ、もう一つの在り方も存在する。いや、『そつち』が本筋だ。

道と付くモノ共通の『精神』を鍛える在り方。つまり、弓道に於ける皆中とは、技術の延長線にあるものではなく、精神論の延長線上に在る。目に見える的を射るのではなく、心に映した的を射る。それが弓道の本質であり、主将の在り方だ。

「それを聞くに、『彼』は仙人に思えるな」

それには諸手で賛成。だから部員達と弓に対する姿勢が違い、認識に齟齬が出る。

主将はあくまで精神論的な視点で『中たる』と言ひ、私達は技術的な視点から『中てる』と言つ。

一字違い、微妙なニュアンスの違いだが、決定的な齟齬。

曰く、「射る前から中っている」と。

「益々面白いな。奴にしてみれば的がなんであれ いや、弓じやなくても『あたる』ヴィジョンが明確なら『あたる』んだらう。」

周りに左右されない精神・肉体の制御：か？ 確かに、それだけ自身を鉄の意思で抑制出来るなら頷ける」

え！？

と思う私にフオローするかのように続ける真田先輩。

「武術的な意見だが、中たるイメージが明確に掴めるってことは、それだけ肉体と精神の隔たりが無い。

目に映るのを狙う自身と、イメージに齟齬がないからそうなる。齟齬がない、つまり肉体的にも完璧な統制が出来てる訳だ。

そのうえ、遠いものを狙う以上僅かな風でも外れる。なら、それは外界の機微にも敏感なハズだ。精神論的な観点から言うなら 無の境地つてヤツじゃないのか？」

漸く氷解した。私達と主将の違いが。確かに、思い起こせば何となく分かる……気がする。

僅かにも振れない身体。見ているこちらが寒気する程の、そこに居ながら世界に溶けたかのように存在が視えなくなる構え。言うならばこれが無の境地、か。

「ふむ。なら『彼』は正に仙人と呼ぶに相応しいな。それに」  
続く言葉は私達を驚かせ、同時にある期待を抱かせる。

#### 特別課外活動部

それは深夜0時に潜む隠された時間、そしてその謎を追う為の集団。あらゆるモノから認識の埒外に在る『影時間』と呼ばれる隠された時間、その謎を解くカギとなるであろうタルタロスと呼ばれる影時間にしか存在しない場所 その攻略。

勿論、『あらゆるモノ』とは言ったが、本来の意味ではない。『特殊な資質を持つもの以外』と頭に付く。

その『特殊な資質』を

「『彼』は持っている可能性はある。まだ目覚めてないか、既に覚醒しているかは分からないが」

影時間を認識し、自由に行動出来る者に共通しているモノがある。己の内面に在るもう一つ的人格、可能性を飼い馴らし、現界せしめ

使いこなす。『個 Personal』の元になった言葉、仮面の意味を持つ『PERSONA ペルソナ』と呼ばれる存在。

ペルソナは、もうひとつの自分・人格など神や悪魔のような可能性の存在として現れる。だが、仮面として現れるペルソナも、飼いや馴らすには自分に向き合う必要がある、強い精神力が必要だ。

「なら、主将も『強い精神力』があるから喚べる……？」

可能性の話したが、と桐条先輩は言い考えに浸るように俯き加減で黙する。

ゆかりには、前々から疑問に思うことがあり、その一つがこの『戦力増強』だった。確かに、影時間はただの『時間帯』としてあるだけじゃない。『シャドウ』と呼ばれる異形が跋扈し、ペルソナを使う者 ペルソナ使い 以外に倒せない。

ならば戦力は必須だが、どうにも腑に落ちない。つい先日仲間になった『彼女』もそうだが

『無理強いする理由が分からない』

一応、要請と言った対面はあったが、半ば無理矢理に近い。

『まあ、そんな風に思うのも、桐条 に思う所があるからなのかな……』

初めから「ただの先輩」として見ていないから、そんな機敏にも反応してしまうのか……

桐条美鶴は会談の翌日、弓道部主将に合う事に成功する。

何やら『また』学園の備品の修繕をしているらしい。『彼』が度々こうして備品の修繕をしているのは学園全ての者が知っている。そして、生徒会長としての自分は非常に助かっている。

まだ新しい学園ではあるが、物である以上壊れはする。それを無償で修繕する『彼』の存在は一般生徒はどうあれ、生徒会や教師は予算等で手を妬く必要が薄れ、手際や仕事の良さに信頼感が高い。

勿論、生徒会の長である美鶴も信頼している。常々生徒会にほし

い人材として目を付けていた。

普段なら人を使うことに躊躇いもない、効率的な指揮についての教育もあり、有無を言わせないとところだが

『計りかねる…』

見返りの求めない、或いは見返りの無い 自分が知る限り

完全奉仕作業なところに警戒心が先立つ。

確かに、何度か修繕依頼もした……が、特に生徒会に取り入ろうとも、内申書を気にした風も無く

今まで受けた『教育』に真つ向から対峙したような思考。ただ何か一つでも分かり易い指針が在れば良かった。上に立つ者は、下の者を使う上で『責務』がある。

金・荣誉・権限……そういった個々の『欲求』を半ば満たし続け、飼い馴らす。満たすのは100ではいけない。常に見える形で餌を撒きつつける……

そういった形が理想。特別課外活動部も例外ではない。周りに頼ることの出来ない『特殊性』 『知ってしまったが故の危機感』と『生き残る』と言う 欲求 を満たし続けること。

目先に迫る死の恐怖と、誰も認識出来ない『時間』での孤独感……この二つを回避する指針こそ『特別課外活動部』に於ける餌と言えた。

『問題は 彼の欲望が見えないことだが……』

丸二年も見てきたが、撒き餌が無い以上、コントロールは出来ない。

『しかし……妙に器用なヤツだな』

今、彼は視聴覚室のスピーカーを直している。こちらに気付いてないのか、黙々と作業を熟していた。

少年のあどけなさ、真剣な瞳。赤い毛と。身長はそれほど高くなく、しかし体つきはとても良い。なかなかがつちりした身体だ。

彼も私も今年で3年。こうマジマジと見るのは初めてだった。

彼とは『衛宮士郎』と言い、同じ3学年になる。クラスは



今まで被ったことは無い。

『ふむ。このままでは夜になるか……』

彼を眺めるのを止め、巖戸台分寮へと帰宅する

「市街に微弱だが、シャドウの反応がある」

美鶴によるダメ元の索敵で辛うじて拾えた微弱な反応。だが、元から索敵に特化してない美鶴では場所の特定が出来ず、怪我をしている。俺は現地には行くが、はっきり言って役に立たない。

「大丈夫っス！ 真田先輩、オレらに任してください！」

そうは言うがな、新入りのお前らだけってのは心配だ。特に伊織お前な。

「ヒデエ！？ オレだつてヤル時やヤルんスよ？」

なんで疑問形なんだ。まあ、美鶴はさほど心配してないようだし、この前のデカイ奴じゃなさそうだしな。

「！？ 反応…近いぞ！」

身構える俺達。その先に居たのは…

「なっ！？ 衛宮先輩！？」

岳羽の驚きと、呼んだ名前が全てを物語る。シャドウに追われていた衛宮がそこに居たのだ。

衛宮士郎はその日、帰宅するのが大幅に遅れた。バイトも終わり家路に着く頃には深夜の0時に差し掛かっていたのだ。そこで体験する、有り得ない世界。

師である養父を亡くし、一向に上達しないがそれでも彼は魔術と呼ばれる秘匿された神秘を学ぶ者だ。だが、今身近に迫る脅威は全く異質なモノ。

一桁の酷い成功率とはいえ、魔術の発動 強化 に成功するも、目の前の黒い化け物には全く通用しない。やむを得ず逃げる。

『一般人が居ないのが幸いだ』

この期に及んでそんな心配をする者こそ、衛宮士郎。だが、彼は勘違いしていた。一般人はそこに居るのだ、姿型は変わっているが。

だからか、逃げた先に学生服姿の複数の人影が見えた時、彼は覚悟を決めた。

「逃げる！ こっちへは来るな！」

全力で叫ぶ。そして人の居なそうな場所へ駆ける。その行動に、学生服の幾人かが驚きの声を上げた。

移動した先は袋小路。進退も無い全くの 0。

「はは……爺さん、約束守れそうにないや」

「うおおっ！」

衛宮が急な方向転換した後、急いで追いかけると、そこは袋小路。追い詰められた衛宮と、追い詰めたシャドウが居た。

制しを掛ける前に伊織が飛び出すと、シャドウは素早く反応し避ける。派手に転倒する伊織に追撃するシャドウを何とか抑えたのは最近チームリーダーとして活躍している 彼女 が助ける。

「岳羽！ 明彦と共にバックアップ！」

指示を出しながらホルスターから銃型のモノを取り出し、自らに銃口を向け

「来い！ ペンテシレア！」

引き金を弾く！

## C1・其は、夢の歩み人々後編

衛宮士郎は異形から必死に逃げた。途中で一般人らしき複数の学生服姿から遠ざかるように

だが、そんな彼の内情とは別に学生服姿が追い掛けて来ていた。

内一人は模造刀を振り回し 派手に転倒した。

予め分かっていたのか、ヘッドフォンを首から下げた女子生徒がフォローする。

加勢しようとした時

「来い！ ペンテシレア！」

聞き覚えのある、凜とした声に視線を移す。そこには

「なっ！？ 銃だっつて！」

銃を 自らの頭部に充てた 女生徒、自分の通う学校の生徒会長『桐条美鶴』が、そのまま引き金を弾いた。

次の瞬間、確かな魔力の奔流と共に『幻想』が権現する。女性的なラインと、鋼を纏うかのような軍衣装。表情の窺い知れない鉄の仮面

指揮棒のように振るうのは細身の剣、振るう剣より出るのは空間を瞬間氷結させたような氷の塊。

『なんだ！？ 召喚系の魔術？ それに物理的な重みのある魔力放出！？』

悲しきかな、師の居ない士郎には知識が無さ過ぎて出鱈目さも、なにもかも規準すら逸脱していることに気が付かない。せいぜい、『召喚系らしい』ことと、『現象として顕れた魔力』くらいしか判断出来ていない。

通常の召喚に掛かるコストと時間や、魔力以外に対価の無しに現象を引き起こした異常に気が付かないのだ。

『それはいい。それより』

あの銃が召喚の為の礼装なのか。でなければ自身に銃口を向

ける事の説明が付かない。

「くっ!? 氷結が効かない!?!」

美鶴は焦りはじめた。氷結　ブフ　はペンテシレアの主立った攻撃手段だからだ。

一応、レイピアは持ってきているが、混戦では味方への同士討ちになりかねない。伊織の鉄は踏まないし、踏みたくもない。

「あー、もう! 動くなっ!」

岳羽の苛立ちの声も尤もだ。このシャドウ、中々素早い。

「うらあっ!」

「止せ、伊織!」

起きた途端、果敢に突進する伊織に制止を掛けるが

「ひゃっ!?!」

間に合わず、岳羽の指が弦を弾く。咄嗟に狙いを反らしたが伊織の眼前を通り過ぎ、危険に身を竦ませた為に出来た隙に

「マジかー!?!」

リーダーである『彼女』共々吹き飛ばされる。

『まずいな、この状況では優先的に私が狙われる!』

先のブフ以降目立った動きのない私が今一番『脅威にならない邪魔者』だ。放つていては邪魔だが、与し易いなら当然だった。

案の定、こちらに向かうシャドウ。狙ってかどうか分からないが、私と岳羽の間にシャドウがいる。当然、岳羽の矢　援護　は　同士討ち　になりかねない。そして、すぐ隣に影時間に適性はあるといえ、一般人　の衛宮がいる。

『状況は……最悪だ』

身構える。迫るシャドウ。ただ、勢いのまま振るわれる敵の攻撃が見えた時　横から衝撃が来た。

『な、にが?』

咄嗟のことで少し混乱しているが、背中痛みと腹部の痛みは衝撃と打ち身の痛みだ。背中痛みは簡単だ、地面に倒れた為。腹部

は

「衛、宮？」

どうやら、私を助ける為に横から被さってきたようだ。

だが、どういう事か……

その衛宮の脇腹から流れる赤い雫は？ いや、それも簡単だ。分かってしまった。ペルソナに加護も無しにシャドウの攻撃を受けたのだ。そんなモノ、火を見るより明らかだ。

「おい！ しっかり」

「うぐ、あ……、大丈夫か？ 桐条……」

大丈夫か？ 桐条……

頭の中で反芻する言葉。自分自身の怪我より、死に直面した今より……

私を心配していること、それがシヨックだった。

こんなモノ……、知らない

ああ、知らない。完全な自己犠牲。己の死すら勘定に入れていない異端のモノ。

理解した。理解出来ない と理解した。私は、桐条グループの総帥の娘。生い立ちから既に他人より上で、他者を使う者。そして、常に対価を支払う者。

対価は『責任』。ゆつくりと幽鬼のように立ち上がる衛宮にも、当然『責任』を負わされた。その傷は私が付けたモノ。だから、彼に対して責任がある。

だが、返せない。対価が見付からない。無いのだ！ その『自己犠牲』に対する明確な『答え』が……！

上半身を起こしながら、彼を見る。苦しいハズのその身体の痛み  
に顔が

「え……？」

笑みを刻んでいた。

『助けられて良かった』 そう聞こえた。まるで、私が無事だったことが助けた『対価』だと言わんばかりに……

『はっ！？』

不意に、状況を思い出す。幾分か警戒しているが、シャドウが迫っていた。そして

『無い！ 召喚器！？』

肝心の召喚器を手放してしまったようだ。正に絶体絶命。目の前には負傷した一般人。私はペルソナを呼べない。なら、この責任は私にある。私が助からずとも責任は果たす。

「衛宮、逃げ」

その時、気付いた。負傷した衛宮の右手に握られたモノに。

それは召喚器、私の召喚器だ。

振り返り、シャドウと対峙する衛宮。躊躇いすら無い、自然な流れで銃口を側頭部に宛がい

ペ・ル・ソ・ナ

その引き金を弾く！

その場に居た5人の男女は新たな 使い手 の発現に心奪われる。

使い手 足るには必要な力、『ペルソナ』 今、此処に確かな

『力』を形作る。

「『 我は汝、汝は我。」

我は汝の心の海より出でし者。理想を追いし、この身を剣とする

者 『』

美鶴は、目の前の男の姿から目が離せなかった。

呼び出した、その心のに潜む神や悪魔の化身を。

真っ赤な外套を着た黒い男性……のような姿。人なら顔に該当する場所まで黒い。身体は機械のように硬質的で、黒い仮面のような顔を横に向けていた。逆立つ白い髪のようなモノが一際目立つ。

トレース・オン

そんな眩きと共に無手だったハズの手に、白と黒の双剣が握られていた。美しい夫婦剣。それを 左右に投げ捨てた。

「なっ!?!」

思わず張り上げる声。それと同時に突進するシャドウ。当たり前だ。せつかく呼び出したペルソナ、そのペルソナが出した剣。それを投げたのだ。

再び無手になるペルソナ。だが、驚愕はそこで終わらない。再びを続けて見る。それは焼き増しの映像か、その手に 全く同じ二振りの剣が顕れていた。

その二刀で迎撃。だが、シャドウはその軽快な動きで双剣から逃れる。しかし、それすら予定調和か 先程の 二刀 が、シャドウの身を切り裂く。

空を渡り、飛来したのは最初に呼び出し投擲した双剣だった。その双剣が敵の逃げ場を最初に奪っていたのだ。

手に持つ双剣を避けても死、避けずとも死。予め予定されていた結末。飛来した双剣に身を裂かれ、駄目押しの連撃に完全に消滅するシャドウ。

用が済んだ双剣はいつの間にか消えていた。誰も声を出せない。静かな闇の中、シャドウを滅した衛宮が崩れるように

「あ……、おい! 衛宮!」

あれから4日経った。私こと桐条美鶴は今、桐条が抱える病院の一室に居た。

「よう。無事だったみたいだな」

開口一番、重体だった衛宮が私に言った言葉がこれだ。明彦が言ったように、自身の制御が得意なのか、痛みもあるだろうにそんな事を言ったのだ。

「馬鹿者……、それは私の台詞だ」

そうか と、それだけ言ってまた眠りにつく衛宮。それが昨日。今日は言いそびれた言葉を言いに来た。

瞳を閉じ、寝ているであろう男の顔を眺める。他人が起きるのを

側で待つのは初めてだ。想像すらしなかった状況に、妙な緊張感が出て来てしまった。

そんな緊張感に耐えられなくなったところ、小さな呻き声と共に覚醒していく衛宮が見える。

「う…………？ おはよう、なんだ、別に起こしても良かったのに」  
「どうやら起こさないうように黙っていたと思ったようだ。違うのだが…………実際にこさなかったのだから間違ってもない。何せ、起きてもらわなければ私の用件は済まないのだから。」

「あ、いや、その…………」

落ち着け、美鶴。まずは挨拶だ。相手が挨拶したのだ、桐条の娘として恥ずかしくないようにせねば。

「んん…………、ああ、おはよう。そして  
ありがとう」

私の「ありがとう」の言葉にキョトンとする衛宮。そう、私の言いそびれた言葉は『感謝』。彼に対する対価としては足りない。だが、絶対に必要な対価だ。この感謝の気持ちを贈らずに、何を贈れと言うのか…………

しばらく考え込む衛宮。どうやら本当に思い至らないらしい。待つこと数秒、漸く思い出したのか相槌を打ちながら

「そっか、皆無事だったんだ…………」

「まただ、その不思議な笑み」

衛宮士郎について、もう一つだけ分かったことがある。本当に彼は無欲だ。そして、自分がお礼を言われた事より誰かの為に喜ぶのだ。

『衛宮…………士郎、君は』

何処までも他者の為に傷付く、きつと自らが滅ぶまで。それはダメだ、それだけはダメだ。私はまだ、対価も責任も彼に返してない。

「なあ、聞きたいんだけど、この前のアレ。あんなのがそこら辺にゴロゴロ居るのか？」



私の内心を余所に、真剣な顔で問い詰める。元々、彼には話すつもりだった。なら、ここで話しても良いだろう。

「ああ、実は」

「そっか。分かった、手伝えることがあれば言ってくれは？」

説明も終わると、まるで考えてすらいないかのような速さで「手伝う」と言う。

「いや、ちゃんと考えたぞ？ その上で手伝うって言ったんだ」

「だが、しかし……」

私はどうかしている。初めから協力させる気だったくせに、何故か今は彼を危険な目に遭わせたく無いと思ってしまった。

「……俺、さ。正義の味方 になりたいんだ」

ポツリと漏らす言葉に、一瞬理解が及ばなかった。理解したとき、理解した事を後悔する。

やはり彼は止まらない。いや、止まらないのか。何も知らずに協力を得れば良かった。だが、知ってしまった。

もう、破綻している。彼の理想は、幻想だ。手の届かない幻を想い、その為に自らを蔑ろにする壊れたヒトガタ。誰も気付けないその理念、それに気付いたのは

『おそらく、私だけ……だろうな』

彼は私の知る世界に居ない。初めから対価は釣り合っていないのだ。なら、持て余した私の責任はどうなる？

『なら、いつそ私の元に引き入れてやる』

群れから逸れたなら、群れに戻すまで。その上で、ゆっくり対価を払おう。

「分かった、なら歓迎しよう。『特別課外活動部』へ」

「ああ、宜しくな。桐条」

む？ 桐条……か。私は対等に呼び合える仲としては明彦が居る。

だが、明彦は『美鶴』と名前を呼び捨てだ。他の者は、さん・くん・さま……そういう形で呼ぶ。しかも、『桐条』と言う『家名』で、だ。

だから違和感があった。対等に呼んでくれるのは嬉しい。だが、家名を対等に呼ばれるのは初めてだし、しつくり来ない。

「……そうだな、私のことは『美鶴』と呼んでくれ。何故か君のその呼び方は違和感がある。

その代わりに、私は『土郎』と呼ばせてもらおう」

「美鶴……さん？」

「……………」

「あー……、美鶴？」

「それで良い、土郎。私達は今日から『特別課外活動部』の仲間なのだからな」

こうして、新たなペルソナ使いが特別課外活動部に参加した。季節は穏やかな陽射しの出会いと別れの季節。一年後の定められた別れの時、この出会いをどう想い馳せるのだろうか

## C2・皐月の明夜〜前編1

巖戸台分寮。

浅い夜、夕暮れと言うには遅い時間。男女混合で入寮する一風変わったその寮だが

これまた珍しく、厨房より良い香りが漂っていた。

この寮に住む者は、だいたい料理をしない。出来るかどうかではなく、学生と言うには些か特殊な事情も手伝い、出来合いのモノを購入するのが常だからだ。

個々に、部活動や生徒会、そういった用件により複数人分の調理を纏めてする事も稀。

そんな稀な現象が、4月も終わろうという頃の土曜日、この時間に起きていた。

主食は白米。それに煮魚、ほうれん草の和え物、豆腐と玉葱の味噌汁。窮めてオーソドックスな和食メニュー。特別に目立ったモノは無い。

だが、どれ一つも“劣ったモノ”もない

ある種、完成されたソレがある。調和したソレは、総て一の“食”を体言する。個々に視るよりも圧倒的な存在感。

「うおっ!?! すっげえ!!」

ポリウムと言う面で見れば、こじんまりした印象の強い和食。

だが、ポリウムだけが“食”の全てではない。

「ちよっ! 順平

、ちよっとは落ち着きなよ!!」

無駄に興奮する男子生徒 伊織順平 と、それを窺める女子生徒

徒 岳羽ゆかり 。窺めてはいるが、その実順平同様に驚き

同時に複雑な気持ちもあり 何とも言えない表情で、食卓に並ぶ料理を見ている。

彼女自身、料理が出来ないワケではないが、この料理人には到底

及ばない。このオーソドックスな和食すら、完璧に見えてはそれ以外すら勝てる幻想を画けない。

「ふむ。久しぶりに早く戻ったが、まさか既に料理が並んでいるとは思わなかった。岳羽、君か？」

女性の声に振り向くゆかり。本人の言の通り、久しぶりにこの時間に戻っていた女性 桐条美鶴。

普段は生徒会の会長職や『桐条』としての仕事があるからか、もう少し遅く帰宅する。……本当に珍しい。

「あ、桐条先輩

これは私じゃなくって」

「衛宮先輩っスよ！ スゲーっスよね！？ いや、マジで」  
横合いから台詞を “興奮気味に” 取られ、非常に迷惑そうな顔をするゆかり。

そんなゆかりを見てもまた、

「ほう、それは

では、御相伴に与ろう」

いつも通りの美鶴がいるわけだが。

そこへ、“料理長”が厨房から最後の一品の

「うっおー…ッ！ につく、じゃがーッ！！！」

天に吠えるかの如く、伊織順平に叫ばれた名を「肉じゃが」。

脇を締め、拳を握り感動に咽ぶような姿の順平。 そんな彼を

見る辺りの者は冷ややかだが。

「いきなり何だ？ ……って、美鶴、お帰り」

「あ、ああ。ただいま、士郎」

順平の奇行に、原因である彼は困惑しながらも美鶴を迎え入れる。当の美鶴は何故か驚いたように吃りつつも返す。

つづいて、同じように肉じゃがの器を持ち、厨房から現れる男女の生徒二人。真田明彦と 特別課外活動部の新入部員でリーダーの彼女 御子杜音緒。

「お、美鶴。帰ったか。

……どうだ？ 驚いたろう？」

器を置きながら、目線と顎の動きで食卓の料理を指して言う明彦。確かに驚いてはいる美鶴だが

「君が作った訳でもあるまいに。しかし、見事なモノだな、これは」

同意を示し、視線を料理に向ける。

桐条と言う家庭で言えば、これ以上の職人達による、これ以上の食材を使った、これ以上の料理は食せるだろう。

だがこの年齢<sup>トシ</sup>、学生の身分で買える食材で、これほどに出来た料理は感嘆に値する。まだ食してはいるが、視覚と嗅覚を十二分に満たしているのだ、きつと味覚も満たしてくれる。そんな期待を持たせる料理である事は間違いない。

長くなつたが 寮生達はこうして夕食を共にするのだった。

美鶴は一人、作戦室で機材を弄っていた。

なかなか成果が上がらないが、それは本来の適性とは違うからに外ならない。

適性とはペルソナのこと。彼女のペルソナは元々は索敵向けではない。索敵も可能だが、それに特化していない以上 限界は自ずと知れる。

だがそれでも、彼女は諦めはしない。現状維持が精一杯だが、止めてしまえばそれは0を過ぎマイナスになる。そして、止めた状態を0にすれば 確実にプラスの行為なのだから。

ふう……

短く小さな溜息を吐き、一度機材を弄る手を いや、身体全てを休める。そろそろ影時間の終わり、そして「特別課外活動」の終わりでもある。

息を吹き返すかのように、世界に生が満ちる。無機物、有機物を問わず一様に変質。又は停止か。していた識ることの出来ない世界（時間）の終わり。日常の再来。日常に不必要な力は要らない

緊張を解いた身体、正確にはその鼻腔が信号を脳に送る。反転した世界で忘れていたことを、回帰した世界で思い出して……

“ソレ”が思い出したのは香り。そして熱、色。四角いトーストと、白い兎に躍る色彩。一人の職人が生んだ“ソレ”の出時の熱は下ってしまったが、その人肌を思い起こさせる暖かさが存在感をアピールしている。

ナプキンを掛け、御絞りで手を拭く。

視る先は、黄金色に染めた肌。ドレスのように純白を纏い、アクセサリーは紅色。

素朴だが、愛らしさが在る。

そつと、手に取り、近付ける。

口許に近づく程に、鼻腔を刺激する僅かに甘い香り。先ずは“ソレ”の香りを味わう。

瞳も鼻腔も満たした。なら、後は

そこまで考えて、数時間前の事を思い出し

「くすつ……

ああ、これは。なかなか“癖になる”

頬が緩むのは仕方ないだろう。あの賑やかな夕食の時も、同じように食す前に満たされたではないか……

嚙り、口に含む。

咀嚼する程に、口一杯に広がる“至宝”。甘いのは、甘いと感じるのは……何も、味覚に訴える甘味料だけではないだろう。それは

……

「心に訴える幸福感」

今まで知り得なかった、その味わい。

コクッ……

首を縦に、一つ、また、一つ。

味わい、満たされる度に、一つ、一つ。

『本当に　癖になってしまっうな』

夕食の時も、頷くように頭こぶを揺らしていた。気付かずにいた私は  
士郎の笑みに顔を赤くしたものだ。

私の姿に、満足気に笑みを作る士郎。「うん、良かった」　そ  
れだけを口にし、そこで私は自分の行動に気付くのだ。

伊織や岳羽、明彦は賑やかに食事をしていたから、私達には気が  
付かなかつたようだが……

癖になりそうな“コレ”は、私が知る限り一般的ではないのだから  
変に思われるのは、恥ずかしくもある。

賤しく見えないだろうか？　そう思うが、少なくとも士郎は呆れ  
てはいないと思う。

コン、コン

硬質的な乾いた音が二回、閉じた空気を震わせる。来訪者が自ら  
の訪れを知らせる音。

「　どうぞ」

6割程度まで攻略されたトーストを食器に戻し、唯一の出入口で  
あるドアに向かって声を掛ける。

ドアノブ特有の金属の噛み合った音と、それに続く蝶番の軋む音。  
急ぐでもなく、丁寧に開けられたドアから覗く顔は、学園の理事

長を勤める男　幾月修司　だった。

「こんばんわ。今日も頑張るねえ」

砕けた口調と、独特のイントネーションが印象的な男だった。

……尤も、「最悪に印象的な」特徴もあるのだが。

その幾月が見馴れた部屋に、あるはずもないモノを見付ける。

「おや？　随分美味しそうな夜食だねえ……」

と言うか、君がこっそりと夜食を食べるタイプとは思わなかった  
なあ、僕は」

「え？　ああ、これは士郎が用意してくれたものです」

「へえ、彼かい？ まだ会ってはいないけど、備品修理とかで良く名前を聞くよ。『ブラウニー』なんて呼ばれてるみたいだね。しかし、調理も出来るなんて、いやあ、若いのにすごいねえ」  
何故若いのにすごいのかは分からないが、『ブラウニー』との呼称には頷ける美鶴がいた。

実は索敵に集中していて、いつの間にか夜食が用意されており気付いた時には短い赤毛がドアの隙間から見えなくなる所だったのだから。

寮内の設備も、いつの間にか直っていたりして、他に該当者が居ない為に聞いてみれば、

「『ああ、俺だけど　もしかして、迷惑だったか？』」

と言うのには、もう馴れてくる程だった。伊織辺りは「本当にブラウニーって居るんだな……」などと、腕を組み、顔を傾げながら一人妙な納得の仕方をしていたが。

「理事長も一ついかがですか？」

「ん、いいのかい？ “彼”が“君の為”に作ったモノだろうか？  
二切れの片方、手の付けてないトーストを勧める。

が、妙に一部を誇張するような言葉の意図が掴めないのだが……  
「？ ええ、私も元々夜食を摂るつもりは無かったので、もう一つを理事長が食していただければ助かります。

残してしまうのも、やはり悪い気がしますし」

せつかく作ってくれたモノだ、無駄にはしたくないし、理事長にも土郎を知ってもらうのに良いだろう。

……なのに、傾げて眉間に指を宛がう理事長。その様子は呆れに似た脱力感が見て取れる。

「まあ、確かに無駄になるのは忍びないねえ。

分かった、御相伴に与ろう」

「これは彼に謝らないとダメかなー」なんて漏らすのは如何なものか。土郎に御礼を言うなら未だしも、「謝る」とは？

……特に今見た限りでは理事長は何も謝る事をしてはいない気が



する。……若しくは私、か？

……分らないな。

また、幾分か冷めてしまったトーストを頼張る。まだほんのり温かいミルクの入ったカップを手取る。

『温かい内にただけ良かったな』

ものすごく惜しい事をしたかもしれない　いや、間違いなく惜しい。

「いやあ、これは美味しいねえ。

簡単ながら、きめの細かいものだよ、これは。出来立てが食べれなかったのが実に残念だよ」

理事長の言葉は、正に今の私の心情だ。シャドウが何時来るか分からず、気を張っていたから今まで食せず、来ないと分かっていたのならここまで残念がる必要性などないのだから。

しかし、自分の心情を他人が的確に……

しかも、こちらの気持ちを露知らずに語られるのが、ここまで“痛い”ものだとは

「うおっ！？　美鶴君、ちょっと、それ、怖いかな？　うん」

……少し、苛々していた。顔に出ていたのか、理事長の反応を見るに　出ていたようだ。意味も無く、その意図も無いが、理事長に当たり散らしたようなものだ、以後気をつけねば。

しかし、私の周りの環境が随分変わった。“仲間”も増え、最近はまだ作業のような日々、ほんの少し安らぎと楽しさを覚えている。

だから、考えてしまう。彼等を利用し、“桐条”の咎を背負わせていることを。

だが、それも呑み下すしかない

涙を飲んで、血を飲んで、苦悩と葛藤を飲んで、怒りと怨嗟も飲み込んで……

それでも成し遂げる必要があり、それが咎人たる“桐条”の“義務”だ

## C2・皐月の明夜（前編2）

美鶴は、時間も遅いとはいえ、土郎に礼を言おうと普段は通り過ぎるだけの分寮2F 男子寮生部屋 に来ていた。

美鶴自身、不思議なものだが、何故“態々”この夜分に訪れたのか分かっていない。風紀的に考えてそれは“オカシイ”と理解出来るハズなのに、それを忘却した。

先程の苛々か、端又疲れがそうさせたのか純粋な気持ちで勝ったのか。とれもがそうであり、どれもが違えているとも言える。答えを知らねばならぬ筈の自身が、その答えを欲している矛盾。つまりは「わからない」と。

岳羽は既に部屋に居るだろうが、2Fの男子部屋前で立ち往生している様子を見れば どう思うだろうか。

……暫くの逡巡の後、「夜半に女性が一人、男子部屋に向かう」と言うとうひいき目に見ても「学生の見本たるべき者の所業とは思えない」愚行と判断し、

「……明日にでも言えば良いではないか」

と結論。今思えば、何故この時間にここに来たのか甚だ疑問だ。

いや、その疑問は先程の

「……ふう、本当にどうかしているな、私は」

溜息と同じように搾り出す言葉で自分を矯正する。

その時だった、誰かの苦悶の声を耳にしたのは

影時間の終わり、午前零時零零分 僅かに一秒。何事も無かつたかのように動き出す時計の秒針が一つだけ動いたのは、誰もそれこそ秒針の動きを忘れた時計すら 知覚出来ない隠された時間。

その影時間をつい最近知覚出来るようになった者が居る。

衛宮士郎

それがその者の名前だった。

彼は一人、男子寮生部屋の一室で胡座しており、瞑想するかのように瞳を綴じている。

「同調、開始」

彼は、影時間を知覚出来るようになった夜に 自分の内面にある、もう一つの姿を見付けた。

その日から、彼のこの日課、「魔術鍛練」に変化が起きた。

イメージするのは撃鉄。あの召喚器

そうして自らの内面に埋没した時、今まで一から生成していた魔術回路が 眠りから醒めるように“起き上がる”。

その数3。薄らと知覚出来る数なら27。一般的な魔術師を知らない士郎には、それが多いのか少ないのか分からない。

解ることは、魔術回路とは“成る”モノではなく、“顕す”モノだと言うこと。

ならば、以前に行っていた鍛練は間違いだったのか？ いや、『前提が違う』のだろう。そもそも『最初の時点で』間違っていた。

では、この数年間の鍛練は意味を成さなかったのか？ と言うとそうでもないのだ。ただ、それを自覚し、恩恵を知るのは今では無<sup>い</sup>だけで……

自らの内に、特異な力の流れを感じ、廻るのを確認すると、木刀を床から拾い上げる。これは今日の鍛練に必要なだから予め用意したモノだ。

「強化、開始」

文字や意味が違うが、先程と同じ韻を踏む。「トレース・オン」と。

内に循環する力を使い、世界に張り巡らされた“<sup>システム</sup>基盤”に命令を送る。命令は「強化」。基から在る存在をより上位のモノへと強化する。

木刀への強化は「硬度」。硬さの強化を求める。

「……っつー」

僅かに汗ばむ額を、右の袖で拭う。視線の先には、左手に持つ木刀。何も見た目には変わらないそれを眺め、満足気に頷く。

そう、彼は成功したのだ。

今まで一桁だった成功率は、ここに来てほぼ100%にも及ぶ成功率に跳ね上がる。亡き養父の指針で、「強化」の鍛練をしてきた自分には、これで漸く魔術の鍛練が上手く行った実感が得られた。と言った満足感がある。

だが……ここで、思うのだ。自分にとって最初に出来た魔術。養父より「効率が悪いから止める」と言われた魔術がある。士郎には未だ満足な出来が無いその魔術 投影 は、もしかしたら今の自分ならより高いステージに立てるかも知れない。

「投影、開始」

三度、口にする韻は「トレース・オン」。そして、意味は「投影」の魔術を行使すると世界に伝える命令。

イメージするのは目の前の木刀。その型をイメージする。

足りない、型だけじゃ、見た目だけじゃ今までと同じだ。

違うだろう？ 中身……中身だ。必要なのは“その存在に必要な

設計図”だ

並べるのは、確固たる存在への基盤になる骨子。存在の定義に必要な構成材質。一つの物質へ昇華させる為の技術を模倣する。それがイメージとして、設計図として書き起こされる。

だが

「うわ、なんだこれ？」

一見、完璧ともとれるその複製の木刀。それは彼には全くの別物に見えるらしい。

……オカシイ。一体何が足りないのか……

外見は全く同じ、その材質も、何度か打ち合った跡である傷も。

そこで気付く。何故、打ち合って出来た傷なのか？ そうだ、こ

それは複製である筈。なら、その傷が出来た経験を投射しなければならぬのでは？

再び、複製を脇に置き、本物を視る。

「同調、開始」

木刀の存在を識る為に、同調を開始する。

基本となる骨子を想定し、

構成された材質を複製し、

製作に及ぶ技術を模倣し、

ここまででは良い。この設計図に、さらに必要な情報を読み取る。それが、「完璧な複製」に成ると信じて。

成長に至る経験を共感する

この木刀は、亡き養父との鍛練と言う遊びのような打ち合いを経験がある。それを木刀から読み込み、

蓄積された年月を再現する

数年間。生まれてから、今日までにソレが宿し、世界に存在を認められた昼夜の数を、ソレを忘れず想い続けた歳月を読み込み、

トレース・オン

再び、複製を開始する。

だが、それは先程の複製 投影魔術 とは違う。

これから起こす神秘は、ただ「中身の無い」複製とは違う。その全てを凌駕し尽くし、たった一つしかないオリジナルを、もうひとつ生み出す奇跡。

たった一つしかない。なら、もうひとつは幻。一人の人間が想い起こした 幻想 それを魔術と魔力を以て結び、一振りの“木<sup>け</sup>

刀“と成す！

じっくり、その贗作を見詰める。  
溜息を一つ。

だが、それは疲れを思わせたが、どちらかと言えば“達成感”を内包したモノ。大きな仕事を成し遂げた者の緊張を吐き出したソレだ。

その出来栄は、彼にとって満足とは言い難いが、かなり惜しい所まで来ていた。真作に迫る模倣、この木刀は今までと違い外見と、その内面に籠められた見えない部分　それこそ“中身”と言えるモノすら投影出来た。

なら、今度は  
近くにあった竹刀袋を見る。同じように魔術回路を励起し、その構成を

「　っ、」  
見ることは出来なかった。

ただの麻袋のソレだ。木刀のように、その基本骨子や構成材質は理解出来、制作技術も解る。だが、その先　“中身”を理解できない。

もう一度、木刀を見る。そちらは二回目ともなり、幾分スムーズに読み取ることが出来た。勿論、“中身”も。

「どういう、ことだ？」  
考える。木刀と麻袋。確かに、材質も型も違うが、共に歳月も経験も想いも同等だ。

なら、何が違う？  
間違いなく違いがあるとしたら“型”だろう。木刀と類似するもの

残念ながら、木刀に近いものなど無い。より近いカテゴリーとしての分類なら　武器、刀剣、か。

「剣　か」

たまに夢、幻だが　朧げに思い出すのは装飾豊かな黄金の剣。  
勿論、そのようなモノを現実に見たことは無い。夢にもかかわらず  
うつつらと思ひ起こせるモノを、何処で見たか覚えていないとは……  
アレ程のモノを覚えていないのもまた変な話だ。

……逆に、覚えていないのに“識っている”となれば、そのこと  
自体に意味が在るとしか思えない。

そう、自分はもしかしたら“剣”のみを識ることの出来るニンゲ  
ンかもしれないのだ。

「剣　か」

もう一度、今度は幾分ゆつくりと、同じ言葉を吐き出す。

思い当たったのは、彼自身のペルソナが持つ陰陽の双剣だ。あま  
り、あの時のことは覚えていないが、あの剣は相当な業物だと解る  
だが　もしかしたら、自分の特性が“剣”ならば到れるかもしれ  
ない。

ゆつくりと召喚器を自身に向け、引き金を引く　！

再び、目にした双剣。見惚れる程のその剣を瞳に映す。

トレース・オン

基本となる骨子を想定し、

あ、

構成された材質を複製し、

あ、が。

製作に及ぶ技術を模倣し、

ぐ、　　っ！

成長に至る経験を共感し、

ぎ、

蓄積された年月を再現し、

あ。

全ての工程を凌駕し尽くし、

……………ッ！？

ここに幻想を結び剣と成す！

苦悶の声は、士郎の部屋からだった。

美鶴は、逸る気持ちを抑えドアノブに手を掛け

「『ドサ……………ッ』」

何かが地べたに伏すような音が中から聞こえてきた。

意を決してノブを捻り中に入ると、そこは異様な何かが在る。

倒れ伏す士郎。三本の木刀。そして

「こ、れは……………」

あの時見た、白と黒の双剣。士郎のペルソナが持つ剣だった。

「それは、後回しだ。今は」

そこまで、独り言のように口に出した時、近づく足音に気が付いた。

「どうした、何があった美鶴？」



部屋に棒立ちしていた美鶴を、怪訝に思った明彦の声だ。ついで視線を部屋に移す頃、漸く美鶴が反応する。

「明彦、士郎を安静な体勢にしたい。手を貸してくれないか？」

それから2日経った日のことだ。作戦室に6人の姿がある。

理事長、美鶴、明彦、伊織、岳羽、御子杜だ。

「で、彼は？」

「はい。まだ意識を取り戻しては……」

短く理事長が問い、言葉を濁らせながら美鶴が答える。心なしか、場の空気が重たく感じられる。

「ふむ。そして、これが彼の部屋に在ったモノ……ねえ？」

テーブルに並べられた“ソレ”らを見ながら、何とも表現し難いイントネーションで言葉を発する。

……何とも表現し難い理由も、皆一様に理解出来、また、「理解に苦しむ」ところが同じだから、だ。

三本の木刀は皆同じで、白と黒の双剣は「在ってはならない」からだ。

三本の木刀は、比喻でも何でもない“全く同じ”モノだった。

傷の位置、重さ、材質

少なくとも彼等には“全く同じ”モノにしか見えない。贋作と言うには あまりに真に迫っていた。

「いやあ、不思議っスね。オレっちにはみんな同じに見えるっスよ。」

内一本を手に取り、振り回しながら伊織が言う。その言葉は、皆の代弁だった。

「ちよっ、危なっ、振り回すな！」

「えっ？ だってよくゆかりっち。木刀在ったらとりあえず振り回すべ？」

岳羽の注意もどこ吹く風で、さらにはもうひとつの木刀を掴み、

二振りを打ち鳴らしはじめる。

皆が呆れたように見ている最中、それは起きた。

パリン

あまりに呆気なく、軽く、高いガラスの割れたような音と、幻想的な光りの乱舞。

伊織が持つ二振りの木刀の内、右手の一振りが“消えた”。

「……あ。」

間抜けな伊織の声すら耳に入らず、皆一様に“ソレ”を見ていた

## C2・皐月の明夜〜後編1

「ちよ！ やべえよゆかりっち！ 壊しちゃったー！」

木刀を破損させた伊織が喚き、それを諫める岳羽の構図を余所に、事態を冷静に推察する者達は 冷静とは言いつつ困惑していた。

「落ち着け、伊織。」

……良く思い出せ、木刀と言うのは『硝子が割れるような音』がしたり、『一瞬で霧のように消える』モノだったか？」

美鶴の言葉に、一瞬理解が及ばなかったのか呆気面を暫く見せた伊織。岳羽も美鶴を見て硬直したが、伊織より早く復帰する。

漸く伊織も理解したのか……今度は逆に複雑な思案顔をする。

尤もそれは、伊織ほどではないがこの場全ての者達が思考すべき謎に直結する。

「これは まあ、僕の仮説なんだけどね。」

木刀、一本減っちゃったけど、三本の内二本……もしかしたら三本全部かもしれないけど、それは『何か』で作った複製だね」

理事長の言葉に、同じく到った美鶴は頷く。

尤も、ここまではだれにでも到れるものだが。

『何か』がわからない以上、『何か』でしかないが……本題はここじゃない。

「さつきまで在った物も含め、材質も形も全く一緒と僕は考えた。」

……でもね、それじゃあなーんで壊れちゃったのかな？」

「え？ だってこう……俺が打ち鳴らして……」

「あー、うん、ほら。同じ物質ならこんなに簡単に壊れないし、確かに片方が壊れるだけってこともあるけど……もう片方は『傷すらついてない』でしょ？」

壊れるだけなら予想出来なくもない。材質が一緒なのは表面部分だけで中は空洞だったり、だ。

だが、重量が同じだったり、破損するほどの衝撃があればもう片方もそれなりに損壊する筈だ。

不可解な事はそれだけに留まらず、その破損 いや『消滅』のしかただ。

「美鶴君、確か彼は初めての召喚の時、『同じ武器』をもう一組出したそうだね？」

肯定の意を表す頷きに、満足したかのように頷き返される。

こと、ここに至り理解出来た者も居るが 約一名、更に困惑を深める者も居る。

「コホン…… あー、で、だね。つまりこれは彼のペルソナ能力なんじゃないかな？ と思うんだけど」

本来なら念を推すように繋げる予定だったであろう台詞は、一人出遅れた者を同じラインに立たせる為の言葉にすぐ変わる。

おー、などと理解したような反応だが、岳羽などは呆れた表情を隠さない。

そもそも、まだ本題に辿り着いていないモノを理解した風なのが謎だ。

「 で、結局そのペルソナ能力って何スか？」

「『はあ……』」

幾人かの溜息が重なる。

美鶴はそれよりも、自分の考えを整理していた為、追いついていない者 伊織だが に視線すらくれていない。

話しが頓挫しているのを感じた美鶴は、理事長を促す。

「ああ、すまない。

さて、そのペルソナ能力こそこの『複製』なんじゃないかな？

どれだけ複製出来るか分からないけど、これってすごい能力だよな  
え」

確かに能力は素晴らしいかもしれないが、美鶴達基準で考えると  
そうでもない。

寧ろ物理的な攻撃手段に傾倒しているように見える為、非常に勝

手が悪いだろう。

例えば、美鶴なら氷や凍結を用いた攻撃が可能だし、明彦なら電撃だ。

殊、この能力を客観的に評価するなら単一特化能力　つまり限定的な範囲での有効性しか見出だせない。

武器を作り出すのは良いが、極論、作って投擲することで遠隔攻撃をするなら美鶴は”そのまま凍結”させる。氷を作り出してから投げるのは、物理的な重みが必要な時。そういうことだ。

だが、その使い勝手の悪いように見える『複製』も、この双剣が否定する。何故なら幾月以外の能力者は双剣から異様な力を感じていた。

それも一際強く、質は違うがペルソナ一体分ほどの力がある。

それを複製出来るとなると、それはある意味御子杜並に強力なペルソナと言えた。

御子杜の能力も貴重且つ強力だ。複数のペルソナを自由に付け替えが可能だからだ。

それは状況に優劣を齎さず、常に自在な戦法を採れる。正にオーラウンダーであり、中心的な立場を強固にする要因だ。

それに匹敵する可能性が士郎にはあり、その理由こそこの複製。

御子杜とは違うが、単一で複数の相手を出来る可能性がある。

ましてや、彼は弓と言う遠隔攻撃を得意とし、その能力すら異常。遠隔攻撃な他の者も炎や風等で可能だが、それは召喚する際に等価のリスクがある。

影時間での活動ではスタミナもそうだが、何より精神力がモノを云う為、乱用は控えたいところだ。

弓も矢の数に限りがあるが……本当に『複製』が可能ならそれは無いも同然で、彼の弓の技能なら外す事すら有り得ない。

少なくとも長期戦に有利な能力だろう。彼自身のスタミナも高いので単一特化とは言え有用な能力だ。

……問題は、その『リスク』だが。ほんの数本で精神力が尽きる

ようでは局地的な場面でしか能力を活かせず

『 だが、私の見立てでは、彼自身は早々に精魂尽きるタイプではなさそうだが 』  
美鶴の予測が正しければ、彼のペルソナはかなり”燃費が悪い”と云うことになる。

何せ、木刀2か3と双剣1で倒れたのだ。美鶴の知る土郎から見てもどう考えてもペルソナの消費量が高いとしか思えない。

「……………ふむ。それは何とも……………」

まあ、こうなったらやはり彼に直接聞くしかないねえ」

お開きとばかりな発言だが、どのみち進展は無いのだ、理事長の言う通り土郎の復帰次第だろう。

陰陽の双剣は、その刀身の美しさを誇張するように、月光を映していた

土郎の病室には、今美鶴が一人で来ていた。

他の者は明彦が検査の為に来ており、御子杜・岳羽・伊織は自由にさせている。

静かな病室で、パイプ椅子に腰掛けていた美鶴だが、変化の見られない現状から退室を考え初め

「……………ッ、……………」

微かな息の乱れと、瞼の動きを見せる土郎に注意が行く。

ゆっくりと、だがしっかりとした段階的な覚醒をする土郎に、肩の荷が下りたような溜息を吐く。

「……………あ、おはよう、美鶴」

再び溜息。

「ああ、おはよう、土郎。

随分遅い起床だな」

苦笑。何も無かったかのような、あまりに日常的な反応に苦笑いも仕方ない。そのまま、土郎の身に起こったことや、今日までの出来事などを話し

「そうか、悪いことしたな……」

「まあ、士郎が無事ならかまわないさ。

……それより、何があった？」

あの晩の事を聞く。

少し考え込んだ後、話し始める。

「あ、ああ、うん。それは」

それは、鍛練の一環だったと。

亡き養父より教わった『魔術』と呼ばれる神秘を行使し、今までより高い場所へ到る為に、彼の『原初の魔術』であり『投影』を使った。

美鶴には『魔術』も『投影』も分からないが、筋は理解出来た。

「なら、あの晩の原因はその『投影』とか言う『魔術』の失敗で倒れ、『投影』とは『複製』のことで合っているか？」

「あー、いや違う。『成功』して倒れたんだ。

あれは会心の出来だったな」

「成功したのに倒れたのか？ ……それはなんとも」

そこで気付いた。あれほど異質な力を纏った『ペルソナの剣』を複製　投影と言ったか　　したのだ、寧ろ成功して倒れただけで済んで良かったのだろう。

「　　いや、そうだな……士郎、今回は倒れたただだが、もうやらないでくれないか。命を落としても私は助けられんぞ？」

忠告の言葉を送るが、鍛練である限り辞めはしないだろう。

それは　　少し悲しいが諦めよう。せめて自分の命の危険性を知覚してくれば良い。無茶だけはしないようになれば良いのだ。しかし、彼はその無茶すら必要なら確実にする。そんな妙な確信がある。

士郎と美鶴の病棟でのやり取りから数日

夜の静けさと闇の深さが、午前零時と共に『影時間』へと墮ちる。作戦室にて日課になりつつあるタルタロス外部　つまり市街地の索敵をしている美鶴がいた。

このところ全く成果が無かったが、自身の能力を疑うような出来事に遭遇したのだ。

シャドウの感知

それは良い。良い結果だ。

問題は別、その反応の大きさだった。

明らかに既知のシャドウとは一線を駕した存在感。先の寮を襲ったシャドウと同等か、それ以上の

「くっ！　非常召集だ！」

モノレールの発着駅の前、そこに6人は居た。

この影時間で動ける人間に限りがあり、現状知りうる限りこの6人しか居ない。そう『特別課外活動部』のメンバーだ。

「今回、シャドウを感知したのはこのモノレール駅から数百メートルほどの場所だ。

今回の活動班は御子杜・岳羽・伊織の三名。残りはここで私のサポートだ」

美鶴の指示に名前と呼ばれた三名は返事をするが、残りの男性二名はムスツとした不機嫌さを隠さない。

「美鶴、俺はもう戦えるぞ！」

「そうだ、俺だってもう怪我は治った！」

士郎と明彦の反応は美鶴の予測通りだった。似たような発言だが、彼等のそれは真逆だ。

明彦は単に『戦う』ことに対してだが、士郎は『御子杜達を助ける』と言う。

どちらも『より強く、危険な相手』に向かった話したが。美鶴としては彼等を引き止める為のシナリオも用意してある。

『全く、世話が焼ける』



「……いいか、君達は少なくとも病み上がりと怪我人だ。確かに大丈夫だろうが、彼等を信じる。もう十分に実戦は経験している」

実戦経験としてなら、タルタロス攻略の進度見ても十分であり、もしかしたら美鶴や明彦以上だろう。

それに、まだ続きがある。

「それに、私は索敵と通信で全く手が離せない。

……この場合、私はどうやって戦えば良いんだろうな？」

明彦になら直接的な物言いでも良いが、士郎にはこれが一番だ。彼の在り方を少なからず知ってしまった自分にはそれが分かり

「ぐっ……」

それを利用するような物言いに自分が嫌になりそうだったが、彼に対する撒き餌は根本からズレているから仕方がない。彼は『誰かを助ける』その事実こそが対価なのだから。

「……分かった。俺が美鶴を護る」

「頼りにしているぞ、士郎」

力強い士郎の返事に、思わず笑みを零しながら言う。

「『なあ、ゆかりっち。なーんかピンクっぽくね？』」

突然隣の順平に小声で話しかけられ、一瞬ビクツと身体を震わすも、同じようなことを考えていたため不機嫌な顔も厭わずに睨む。確かに、「俺が護る」だの「頼りにしてる」だの聞くものが聞けばゴシツプネタに困らない。

ちよつと乙女心を刺激されないこともないが、当の本人達が至つてナチュラルにマジメな反応で、それを目の前にしていると、オカシイのは自分ではないか？ といった錯覚すら覚える。

チラリ　と音緒を見ると、同じように困つたような苦笑をこちらに向けていた。

あまりにあの二人が自然体過ぎて、余計に自分と音緒　と、ついでに順平　がオカシイのでは？　と思ってくる。

あのドラマもかくやと言うアツイ台詞も、実は一般の

『　いやいや、ないでしょ！？　……　ってか、ないでしょ！？　』

内心激しく否定。言い聞かせるように二回念押しで。

「もしもーし、ゆかりっちー。」

置いていくぞー」

一人葛藤している中、先に行ってる順平が声を張り上げて呼んでいた。埋没した思考からか、理解に対して体は中々反応しない。

そんな時に肩を軽く叩く手に振り向くと、優しげに励ますような微笑を向ける音緒が居た。

「さ、私たちも行こ？」

こんな時、やはり同じ年の同性が仲間であつたと、ゆかりは強く思うのだった。

こうして、満月に照らされながらシャドウ討伐が始まる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2363z/>

---

Life Burn/Soul Scream ~ 仮初めのヒト ~

2011年12月11日07時00分発行